死の外科医のいる診療所

SEED暁

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミッドチルダにある個人が営む診療所、医師？と看護師？が一人ずつとペット？という小規模であるが設備は十分に整っており、医師？の腕もよい。

しかしあまり目立たない所にあることからか来る人は決まっているような感じだ。

そんな診療所を営む少年トラファルガー・ローにはある特別な能力がある。

ワンピースのトラファルガー・ローとは能力や名前は同じですが、容姿等は別人です。

目次

カルテ1　死の外科医の日常 ―― 1
カルテ2　死の外科医の能力 ―― 6
カルテ3　死の外科医の友人 ―― 18
カルテ4　死の外科医の診断 ―― 24
カルテ5　死の外科医となのは ―― 31

カルテ1　死の外科医の日常

ここはミッドチルダにひっそりと存在する診療所、一応の入院の設備はあるがほとんど使用された記録はない。
しかし医療器具や機械などの設備はしっかりと整っている、にも関わらず患者はほとんど来ない、勿論医師の腕が悪い訳ではない。
むしろここを営む医師のあるレアスキルを使えば、次元世界最高の医師とも名乗れるかもしれない、それならば何故来る患者が決まっているのか？
それは医師のある勤務態度によるものだった。

診察室の机の椅子に座っている医師である少年、しかし少年の格好だけでは医師と判断するには時間がかかるかもしれない。
何故なら彼はファー状の帽子をかぶり、白衣を辛うじて着てはいるものの、白衣の下は黒いパーカーという格好だ。とても医師には見えない。

しかしそれでもこの少年を頼って来る人がいるには理由があるのだ。

少年はカルテと資料を見ながら、対面式に置かれた椅子に座っている、４０代の男性に先週行った手術の結果を告げる。
男性は大きな心配はしてなさそうだが、それでも一抹の不安のあるような顔だ。

「ふむ、血流、血圧に問題なし、心臓の血管にも損傷、または奇形の異常なし、そして当人の健康状態も良好か・・・・安心していいぜ、施術は成功したようだ」

少年がそう告げると、男性は大きく安堵し笑顔で少年に答える。
「本当にありがとう!!ロー君、娘の心臓病を治してくれて!!」
男性は少年の手を握り、少年の手を上下に振る。
「あー!!やめろ!鬱陶しい、誰が好き好んでおっさんと握手するんだよ」
少年は振り払う。
「そんなこと言わないでくれ、本当に感謝してるんだよ?」

男性がそう言うと、少年は愚痴を溢すように。
「よくいうぜ、こんな手術、普通はこんな小さな診療所がやるもんじゃないんだよ!ミッドチルダの中央にある病院でやるのが普通だ」
「しかし心臓病の手術はかなり時間がかかると聞いたんだ、娘の体力が持つか心配だったんだよ!しかしロー君の力ならと思ったんだ」

この男性の娘は僅か8歳である、半日近くかかることもある手術に体力がもつかは可能性は低い方が多いだろう。

「にしたって、管理局の提督様がこんな小さな診療所で大事な娘の手術を任せるとはな」
少年は帽子の側面をかきながら呟く。
男性とて何も管理局の病院を信用していない訳ではない、しかしそれ以上に少年の医師としての力を信頼していたのだ。
「それでも君は完璧に成功させてくれたじゃないか、それに僕は君の医師無免許を見逃しているんだよ?」
ミッドチルダでは医師免許は18歳からであるが少年はまだ15歳である、医師試験は何歳でも受けることは出来るが、医師免許を持たない限り医療行為は基本的に出来ない。それは医師試験を合格した少年でも例外ではない。

少年は痛い所を突かれたと顔をしかめる。
「くそっ、忘れていなかったか・・・・」

少年が尚も皮肉そうな顔をしていると。

「もう!・トラ男君はそんなこと言っちゃダメだよ!・せっかくトラ男君を頼ってきてくれたんだから!」

彼の背後から白衣を纏った緑色のリボンをした金髪のストレートロングな長髪のツインテールの少女が叱咤する。

少女は腰に手をつけ、明らかに怒っているようなポーズをとる。

「うっ・・・・・・分かったよ!・まぁいい、恐らく大丈夫だろうが何かあったらまた来るといい・・・・・・

当然だが、連絡はしろよな?」

実はこの少年の診療所は事前に患者が連絡をしない限り開いていないのだ、少年曰く、常に患者が少ないのにわざわざ一日中開く必要はないだろというものだ。

「ははは、流石のロー君も彼女には敵わないか」

「うっせ、早く帰れ・・・・・・・・おい!・ペボ!・患者を連れてこい!」

少年が廊下に出るとすぐ近くの部屋にいる少年のペットを呼ぶ。

「アイアイキャプテーン!!」

快活に答えながら、すぐに患者である少女をおんぶしながら二足歩行をし白いジャケットを纏う大きな白熊が出てきた、このくまは一応少年の使い魔である。

「こんにちはクレアちゃん!・ペボ君と遊んで楽しかった?」

金髪の少女が患者である少女に話しかける。

「うん!・ペボはね、とってもフカフカだったよ」

実際には大きな白熊が病院なんかにいたら、怖がられそうだが、ペボの場合はフカフカの毛並みや彼の明るい性格が幸いしたのか、子供には軒並み人気があるのだ。

「ここは保育園じゃないんだが・・・・・まぁいい、おいクレア良かったなお前の病気はほぼ完治したぜ」
少年は患者である少女に簡潔に説明する。

「ありがとう、お兄ちゃん！」
少女は無邪気な笑顔で少年に礼を告げる。
「礼ならいらねんだよ・・・・・・早く帰れ」
少年はそっぽを向きながら無愛想に答える、こんな性格であるが、きっちりと仕事をこなし、アフターケアもさりげなく入れるのである。

「もー！・トラ男君は素直じゃないな～!!」
そんな少年の背中を金髪の少女はバンバンと叩く。
「ゴホッゴホッ、いてぇよ！アリシア、つーかそのトラ男って呼ぶの止めろといつも言ってるだろ！」
少年の名前トラファルガー・ローからの略称であるが、本人はとてと不本意そうだ。
「良いじゃん！・カッコいいよその名前」
「キャプテン、ドンマイ」
全く悪びれない少女の態度にペボはすかさずフォローを入れる。
「黙れペボ、お前に慰められたくない！」
少年がそう言うとペボは頭を俯かせ落ち込んだ。
「ともかくありがとう、じゃ、帰ろうかクレア」
「うん！」
少女と男性は玄関に向かう、少年は愚痴を溢しながらも玄関まで見送る。
そしてドアの前に着た時、少女はまだ落ち飲んでいるペボを心配したのか元気付かせるように。
「ペボ、また遊ぼうね！」
「・・・・・アリガトウ、また来てね！」
ペボは即座に立ち直る。

「アホかお前、ここは診療所だよ何度もきていい場所じゃないだろ！」
「ハイ、スイマセンデシタ・・・・・・・」
少年にしかられ再び落ち込むペボ、このクマは本当に打たれ弱く、立ち直りが早い。
男性と少女が帰ると少年は一息つき。
「よし、今日の午前中はもう予約ないよな？」
少女に問いかける。
「うん！お疲れ様トラ男君」
「お前また・・・・・・・もういい」
このやり取りはもう数え切れないほど繰り返している、そのなかで少年は少女には性格的に敵わないことを学んだ。
「そうか・・・・・・俺は昼飯まで寝る」
「分かったよ！お昼何がいい？」
「・・・・・・・おにぎり」
少年は一言だけ言うと自分の部屋に帰ろうとする。
「アリシアちゃん、オイラは蕎麦がいいな」
白熊が蕎麦を食べる図は中々シュールである。
「お前は今日はドッグフードだ」
「そんな・・・・・ゴメンよキャプテン許して～！」
少年の部屋のドアを叩く白熊、これもまたシュールである。
結局、ペボの今日のお昼ご飯はドッグフードではなかったか、魚肉ソーセージになってしまった。

この診療所ではこんなやり取りが日々起こっている。

カルテ2　死の外科医の能力

朝日が登り、何時もと変わらぬ朝である。
ローは自分の部屋のベットでまだ眠っていた、今日は午前中の診察の予定はなく一日暇なのであるこうした日はローは何時も起きては寝るというサークルをお昼まで続けるのである。

この日もローは朝の8時頃に目が覚める。
「ん・・・・・・朝か、でも今日は診察はないからゆっくりと・・・んん？」
ローは自分の左腕に何か当たっているような感じがした、当たっているというよりかは抱き付いているという方が正しいだろう。さらに彼が左腕を腕を少し動かすと「ふにゅり」と柔らかい何かに触れる感触がする。

「・・・・・・まさか！」

ローは布団をはがすと、薄ピンク色のパジャマを着たアリシアが彼の左腕に抱きつきながら寝ていた。彼は直ぐに離れようとしたが、予想以上に抱き付く力が強く苦戦する。
「こいつ、性懲りもなく・・・・・おい！起きろ！アリシア！」

仕方なくアリシアを起こすことにした、ローが肩を揺さぶるとアリシアは目を醒ます。
「う～ん・・・・・・あ、トラ男君おはよー」
アリシアの柔らかな微笑を浮かべる、その姿にローは一瞬見惚れたが直ぐに本題に入る。

「／／／／／／何度も言ってるだろ！俺のベットに潜り込んで来るな！」

「だって～、一人で寝るのが淋しいんだもん、アリシアは温もりに飢えているんだよ？」
実は今のような状況は初めてではない、アリシアはたまに夜中に起きて喉を潤した後寝ぼけてローのベットに潜り込んでしまうのだ。
尤も、寝ぼけていたからとはいえローの左腕に抱きつきながら寝ていたのは何処か意図的なものを感じるが。

「ガキかお前は！それに温もりならペボと一緒に寝ればいいだろ！」
確かにペボの体毛はとても保温能力が高く、冬には寝心地がいいだろう。
「アリシアはトラ男君じゃないと嫌なの！それともトラ男君はアリシアのこと・・・・・・嫌いなの？」

これがもしペボであったら、問答無用で彼の能力で切り刻んでいるところだがアリシアは別だ只でさえ美少女と言える彼女が目を潤わせる顔は破壊力が計り知れない。

それはローも例外ではなく、なんとも言えない罪悪感がこみ上げたじろんでしまう。
「別に・・・・そういう訳じゃない、すまない、俺が悪かったよ・・・・・」
彼女の境遇を考えればあながち彼女の言い分は間違っていないかもしれない、それを思ったローは素直に謝る。
「ありがとう！やっぱりトラ男君大好き!!!」
彼の謝罪に元気を取り戻した彼女は何時もの笑顔を見せ彼の体に抱き付く。よりいっそう顔の距離が近くなりローの心臓の鼓動も早くなる。
「だから抱き付くのは止めろ――――!!!」

朝にあんなことがあったローは完全に意識が覚醒してしまい二度

寝をする気にはなれなかったため、起きたローはアリシアとペボとで朝食を食べていた。

アリシアとペボはトーストをかじるがローはパンが嫌いであるので毎朝、アリシアが作るおにぎりを食べている。

「トラ男君!今日はアリシア、臨海空港であるヒーローショーに行ってくるからね!」

「お前14歳だろ、まだそんなのに興味あんのかよ」

アリシアのいうヒーローショーとは、ミッドチルダ全域で放送されている特撮ヒーローがイベントでやってくると言うものだ、地球で言えば仮面ライダーショーのようなものだ。

子供を中心に大人気であり、子供っぽい性格をしているアリシアも例外なく夢中になっている。

因みにアリシアの年齢は正確に言えば違うが、身長や彼女の顔つき等からローが決めた。

「そんなじゃないよ!トラ男君にはあのヒーローのよさが分からないんだよ!」

ローは全く興味がないので理解しろといわれても困難なのは明白だ。

「分かるかよ、別に行くのは構わんが、あまり遅くなるなよ」

「え〜、その後も色々回りたいな〜」

空港には大きなショッピングモールが隣接しており、空港の通路からショッピングモールに入れるようになっている。様々な世界の特産品等が手に入ることもあり連日多くの人が訪れている。

「用もないのにほっつき歩くと面倒事に巻き込まれるぞ」

「アリシアそんな子供じゃないよ、知らないおじさんなんかについていかないよ」

ローが言っていることとは一部あってはいるが、少しずれている、確かに誘拐も考えられるが知らない人間についていかないのは１４歳ならば容易に理解できる。
人が多い所にはそれなりの面倒事も付きまとう、つまり何かしらの事故や事件が起こるのを危惧しているのだ。勿論そんな頻繁に起こる筈はないが可能性はなくはない。
「そういうことじゃないんだがな・・・後、
ヒーローショーに行くお前が子供ではないと言っても説得力ないんだよ」
「ひど～い、いいもん！トラ男君はついてこなくていいよ！」
アリシアは頬を膨らませながら怒る。
「言われなくても行くかよ！」
ローはおにぎりを食べきり、自分の部屋に戻っていった。

午後になりアリシアは臨海空港に出掛けていった、ヒーローショーは午後からあるらしくお昼を食べてから出掛けたようだ。

しかし家を出るときのアリシアはローに子供扱いをされたのが気に入らないのか、少しご機嫌斜めのようだった。

アリシアが出掛けてからはローは自分の部屋で医学書をベットに寝ながら読みふけっていた。
ローが読んでいるのは古代ベルカ時代の医学書である。
医学とは日々進歩しているが、だからといって昔の医学が役に立たない訳ではない、むしろ今ローが読んでいる古代ベルカ時代のものは歴史的にも大きな発展を遂げたものが多い。
つまり参考になるものも多いのだ。
当然、このような貴重な資料を民間人であるローが借りられる訳がない、この医学書は無限書庫にあるものだが、ローがある無限書庫の

司書長と知り合いであるため特別に貸してもらっている。
「・・・・・なるほどな、やはり中々参考になるな――――――おっと、もうこんな時間か・・・」
最後の医学書を読み終えたときには、既に午後5時を回っていた、何時もならアリシアが夜ご飯の支度を始める頃だ。

ローは部屋を出てリビングに入る、リビングのソファーではペボがテレビを見ている。
番組の内容は《癒される動物たち特集》というものである。
「おいペボ、アリシアは帰ってきたのか」
「ん、キャプテン、まだ帰ってないよ」
「あいつ、まだ帰ってないのかよ」
アリシアがヒーローショーや買い物に夢中になっているのは容易く想像は出来るが、何処かローはおちつかない。
「キャプテン、心配なら迎えにいけば?」
ローのそんな様子を感じ取ったのかペボはローに提案する。
「アホかよ、それこそあいつの機嫌を悪くするだろ」
またローに子供扱いされたと思われるかもしれない、そう考えているのだ。
「でもキャプテンは・・・・・《臨時ニュースです》・・・・あれ?なんだろう」
先程までやっていた番組の画面がニュースの画面に切り替わる、ローとペボは話を中断しテレビに視線を向ける。
《午後5時頃未明に臨海空港で大規模な火災事故が発生しました、原因は爆発であるとみられで管理局ではテロの可能性もあり得るとしています、怪我人や死傷者も多数出ておりまだ建物の中に取り残されている客や従業員も多数～～～～》

テレビの画面には火災現場の映像が流れており、空港全体が炎で覆われ、瓦礫が周囲に散乱していた。

そしてそれは空港に隣接しているショッピングモールも同じような状況だった。
「キャ、キャプテン、まさか・・・・・」
ペボが想像していることはローにも直ぐに理解できたが先ずは冷静になる。
「落ち着け、必ずしもアリシアがいるとは限らないだろ、今電話をかける」
ローはアリシアの画面を呼び出そうとしたが、いっこうに繋がらずに切れてしまった。
「どうやら・・・・・お前のいう通り、迎えにいかなきゃいけないようだな」

ローはそう呟き。
「ペボ、デバイスをよこせ」
ペボはローがデバイスを使う意味を直ぐに理解し、自身に抱えていたデバイスをローに渡す。
ペボがローに渡したデバイスは一言で言えば妖刀である、ローの背丈ほどもある長い大太刀で名は《鬼哭》(きこく)。
その長さからか普通の刀のように腰に差すことが出来ず、普段はペボが抱えているか、リビングの壁に立て掛けている。
因みに鬼哭の手入れはペボに任せており、普段の態度からは想像できないが、自分の愛刀を任せていることから、心のなかでは信頼しているのはわかる。
「キャプテン、気をつけてね」
ペボに心配そうな口調にローは。
「誰にいってんだ、直ぐに帰るお前は留守番してろ」
ローはそう言い家を出ると彼の所有する、ツアラータイプのバイクに跨がり、鬼哭をバイクに寝かせ、臨海空港に向けて出発する。

臨海空港では既に多くの消防隊や管理局の人間が回りを囲んでい

た、当然炎の消火に取りかかっていたが炎の勢いが強く中々消えず、救助活動も難航していた。
中には空から救助に向かう物もいたが、硬い瓦礫に阻まれる、魔法で破壊しようと思えば不可能ではないが、周りに人がいるかもしれない状況では力の加減が難しく足踏みをしていた。

ローはその状況を臨海空港近くの建物から眺めていた。
「やはり管理局はあてに出来んな」
ローは臨海空港に着くとアリシアを探したが見つからずまだ建物の中にいると判断した。
「セットアップ」
彼の姿は黒いロングコートに変わる。
これ以上悠長なことはしていられない、そう思ったローは右手を手のひらを下に向けながら伸ばし――――
「”ＲＯＯＭ”」
ローがそう唱えると、臨海空港全体を青白いドーム状の円が包む。

突然の出来事に回りの管理局員は驚いているが、説明している時間はローにはない。
ローは左手に持っていた鬼哭を鞘から抜き、鞘を近くに落とすと鬼哭の刃を下にし横にスライドさせる。
「”スキャン”」
するとローの視界には幾つもの光る粒子の様なものが映る、これは人間に備わるリンカーコアにある魔力を映し出しておりそこからアリシアの魔力を探っているのだ。
（何処だ、アリシア!!）
ローは懸命に探り、アリシアの魔力反応を探りだす。
「――――見つけた”シャンブルズ”」
ローがそう唱えると、姿を消した、ローがいたところに残っていたのは小さな瓦礫の一部だけだった。

アリシアは数名の客たちと一緒に建物の中に閉じ込められていた、周りには瓦礫の山となっており、すぐ近くには炎も迫っている。
今のところは偶然知り合った青い髪の少女の張るシールド状のバリアで煙などは凌げているがそれも時間の問題であった。

「私達、大丈夫なのかな・・・・・」
青い髪の少女が落ち込みながらアリシアに問いかける。
「大丈夫だよ、ギンガちゃん!きっとすぐに助けが来るよ」
そう答えるアリシアであったが、不安は高まるばかりだ、既に爆発が起こり1時間がたつがいっこうに助けがこないのだ救助が難航しているのが分かる。
「スバルも無事だといいんだけど・・・・・」
青い髪の少女には妹がいるのだが、爆発が起こる前にはぐれてしまっていたのだ。
「こんな時トラ男君がいれば・・・・・」
恐らく彼の能力ならば、ここから脱出するのは可能だろう、しかし彼は今ここにはいない。

「ごめん・・・・なさい・・・・・・アリシアが寄り道なんか・・・・したから」
アリシアの瞳に涙がたまる。
アリシアはローの忠告を素直に聞いていたとらと後悔する、アリシアはヒーローショーで青い髪の少女とその妹と出会い、その後も行動を共にしていたのだ。
「アリシアちゃん、どうし「ビキビキ」・・え!!!」
青い髪の少女がアリシアに声をかけようとしたとき、突如天井にひび割れ大量の瓦礫が落ちてくる。

今彼女らの周りにはシールドが張られているが大量の瓦礫が落ちてくれば破れてしまう、
青い髪の少女はただ呆然としてしまい。
アリシアは瓦礫を見ながら、心のなかで叫ぶ。
「(助けて！トラ男君!!)」

その瞬間――――――――

「〝ROOM〟!!」
青白いドーム状の円がアリシアと青い髪の少女の周りを包む。
「えっ――――――」
アリシアは驚いた、それはアリシアが何度も見てきた自分が思いを寄せる少年の技であるからだ。
「――〝切断〟!!」
その声が聞こえた瞬間、瓦礫の山はすべて真っ二つに切られた。瓦礫はアリシアと青い髪の少女にぶつかるかとなく、下に落ちる。
アリシアは声のした方に振り向く、そこにいたのは黒い髪に鋭い目付きをし、長い大太刀を持ったローであった。

アリシアはローの姿を確認するとなりふり構わず。
「ふえ~ん!!怖かったよ――――!!」
涙を流しながらローに抱きつく、ローはアリシアの頭を優しく撫でながら。
「ったく、面倒かけんなよ、まぁしかし・・・・無事で良かった」
ローがアリシアを何も子供扱いしていたのではない、ローは単純にアリシアのことを心配していただけだ、しかしローの性格からしてみれば素直に言えないのは明白だった。
「あの・・・・貴方は管理局の人ですか?」
青い髪の少女は突然の出来事に驚いていた、四方を瓦礫に囲まれていたのにどうやってここに来れたのか、そして瓦礫に触れもせずどうやって切ったのか。

「いいんや、只の民間人だよ、このシールドは君が張ってくれたのか、礼を言わせてくれ」
　これ程の芸当をやってのける人間が只の民間人であるのは腑に落ちないが青い髪の少女は一先ず置いておくことにした。
「そんないいですよ！私の方こそ助けてくれてありがとうございます！」
「そうか、ならそろそろここを出るか、君、立てるか？」

　ローは青い髪の少女に手を差し伸べる。
「あ、はい・・・・・あっ！「おっと！」

　青い髪の少女は立ち上がろうとしたが、突然バランスを崩してしまう、ローは咄嗟に彼女の肩を抱き寄せる。
「あ、ありがとうございます／／／／」
　青い髪の少女はローに抱き寄せられ、顔を赤くしてしまう、ローは目付きは鋭いがそれ以外は顔も整っており所謂イケメンというやつだ。
「足を怪我してるのか、少し見せてくれ一応医者なんでな」
　ローは青い髪の少女を座らせ足首の辺りに切り傷があるのを確認する。
　ローは切り傷に左手をかざす。
「このくらいなら――――”接合（イノスクレイト）”」
　ローが人差し指と中指を合わせると、切り傷がなくなった。
「凄い、傷が無くなった・・・・」
「ははっ確かにそう見えるよな、まぁいい、ここから脱出するぞ」
「えっ、でもどうやって・・・・」
「まぁ見てな、”シャンブルズ”」
　ローが唱えると、一瞬でローとアリシアと青い髪の少女は建物の外にいた。
「えっ、何時のまに・・・・・・」
　青い髪の少女が困惑している。

「ギンガ、ギンガなのか!!!」
近くから走ってくる男性がいた、彼は管理局の陸上警備隊の隊長であるゲンヤ・ナカジマ
青い髪の少女、ギンガの父親である。
「あ、お父さん!!!」
ギンガはゲンヤの姿を見つけ、駆け寄る。
「良かった!スバルは高町なのは二等空尉に救出されたと聞いていたがお前はまだだったからな、安心したぞ!!」
「うん、私はあの人に・・・・・あれ、何処に行っちゃったの?」
先程までアリシアとローがいた場所には誰もいなくなっていた。

ローとアリシアはバイクで家に帰っていた。
「いいのトラ男君、先に帰って?」
「アホ、俺は正義のヒーローでも何でもないんだよ、只の医者だ」
「ふ~ん、でもアリシアにとってはトラ男君はヒーローだよ!」
「けっ、調子いいこと言いやがって」
やがて家に着き、玄関に来たときアリシアは口を開く。
「ねぇトラ男君」
「ん?なんだよ」
「何でアリシアのこと助けに来てくれたの?」
アリシアは真剣な表情ながらも少し顔が赤い。
「・・・・・当り前だ、家族だからだろ」
ローは五年前、アリシアに出会い、その時からアリシアを妹のように思っている。
しかしアリシアは不機嫌そうに。

「もー!!!そういう時は俺の彼女だからだろとか、いってよ――――!!」

尤もアリシアはローを兄としてでなく、異性としてみてはいるが。

「ふざけんな、ほら早く入れ、俺は腹がへってんだよ!」

その夜、アリシアはローの眠る部屋に忍び込んでいた。

「スゥ――――スゥ――」

寝息をたてるローのベットに潜り込む、そして――――

「ありがとうトラ男君、大好きだよ・・・・ん・・・・」

彼の頬にキスをした。

翌朝、アリシアはローに怒られることになるのは言うまでもない。

カルテ3　死の外科医の友人

臨海空港での爆発事故から1週間後、ローは何時ものように診察をしていた。

「全く、月に一回の休みを定期検診に当てるとは本当に仕事人間だな」

ローは対面式の椅子に座る彼と同い年くらいの少年に話す。

「ははっ、そうかもねでも僕が体調を壊しちゃうと皆に迷惑が掛かるからね」

少年は自嘲気味の笑顔を浮かべる。

「本当にユーノ君は真面目だよね、トラ男君にも見習って欲しいよ！」

アリシアはローを見ながらいう。

「あ～あ～、聞こえんな、ユーノ検査始めるぞ」

ローはとぼけたような態度を取り、ユーノに検査を促す。

「アリシアちゃん、ローはいい医師だよ、数日前にやった手術だって本来の医療費よりとても安くやってあげたんでしょ？」

数日前に下半身に障害を持った少年がローのもとに訪ねてきた、事故により脊椎が損傷し下半身不随になってしまったのだ、治療しようにも事故の際に細かい金属片が脊椎に入り込み、下手に手術すれば余計悪くなるのだ。

だからといって慎重にしようにも何回にも分けなくてはならないため治療費は莫大なものになってしまう、両親が管理局員ではあるがとても払える金額ではなかった。

車イス生活を余儀なくされた僅か8歳の少年は絶望していた、その少年の話を友達であるクレア聞きがローのことを紹介したのだ。

クレアの心臓病が奇跡的に治ったことは少年も知っていた為、少年はローを最後の希望としていた。

少年がローに事情を話す時も終始涙ぐんでいた。

ローは多くは語らず、ただ一言だけ少年に告げた。

「辛かったな、大丈夫だ!直ぐに直してやるだから・・・もう泣くな!!」

ローは直ぐに”!ＲＯＯＭ《ルーム》”を展開し”切断（アンテピュート）”で脊椎の部分を抜き出し、”スキャン”で金属片を確認し、人工の骨と金属片を”シャンブルズ”で交換し、”接合（イノスクレイト）”で神経を結合させたのだ。

神経は脊椎に多く集まり、一度損傷すると治すのはまず不可能だがまさにローにしか出来ない治療だった。

因みにだが、少年には治療の際に目隠しをしてもらった、痛みを伴う訳ではないが、ローの能力をあまり知られたくないということでの配慮だ。

少年は僅か一回の治療で足が元通りに治り、とても驚いていたがそれ以上にまた歩けることを喜んでいた。

さらにローは治療費を僅か両親の給料の５分の一程の値段で請け負ったのだ。

治らないと言われていた障害がそれほどの値段で治ったことに両親は喜んで応じた。

「勘違いするな、仕事量に見合った値段を取っただけだよ」

ローはそう言うが逆に言えばこの治療が出来るのはだた一人であるが、患者のことを第一に考えるのがローの信念であり、治療費にはあまり無頓着であった。

それを分かっているユーノは彼が本当はとても優しい医者なことを知っている。

「ああ、そうだったよね!」

ユーノは笑顔で応じる。

「んだよその目は、まぁいいや始めるぞ”スキャン”」

ローは鬼哭を抜き”スキャン”でユーノの体の血管、内臓、骨の内

部に至るまで調べる。
　暫くし、ローはスキャンを解くとユーノに神妙な顔で告げる。
「ユーノ、大変残念な結果が出てしまった・・・・」
「えっ・・・・そんな、でもローが治してくれるんでしょ?・」
「いや、残念ながら俺にも無理だ・・・・・」
　ユーノは驚愕した、自分の知る限り最高の医師であるローが治せない病気があるとは、ユーノは大きな不安に駆られる。
「それでどんな病気なんだい・・・・・・」
　ローは尚も真剣な表情でしゃべろうとする、しかし心なしか目が笑っているようにも見える。
「ああ、それはな――――――

　仕事し過ぎ症候群だ!・」
　それを言われた瞬間のユーノは。

「・・・・・・え?・」
「だから言ってるだろ、仕事し過ぎ症候群だよ、いやー俺もこんな症状は始め・・「トラ男君のバカ――――!・」・・いって――!!」
　ローはアリシアに延髄を殴られる。
「もう!・どうしてそんな意地悪するの、アリシア本当に心配したんだよ!・」
　アリシアは患者にはロー以上に気遣っている、それは彼女の優しい性格であり、まさに白衣の天使とも言える。
「あ、あははは、それでロー本当はどうなの?・」
　ユーノはとりあえずローの冗談であることがわかり、安堵する。
「まぁ別に体に異常は見られなかったが、少々疲労が溜まり気味だな、疲労は病気のもとだぜ?・」
　わざとらしい表情を止め、何時もの口調で告げる。
「うーん分かっているんだけどね、なんせ無限書庫は広いし、やること

がたくさんあるから」
　無限書庫とは時空管理局本局内にある、管理局が管理を受けている世界の書籍やデータが全て収められた超巨大データベースだ、　気の遠くなるほどの規模で本棚が並んでおり整理するのにも一苦労なのだ。
「あそこは素人がおいそれと出来る仕事じゃないからな、大変だなユーノ」

　元々遺跡や古代史探索など過去の歴史の調査を本業とするスクライア一族のユーノにとってこのような文書探索などはむしろ望むところではあるが、やはり人手不足には変わりない。
「元々好きで始めたんだから文句はないよ、それにローがたまに手伝ってくれるから、こうして休日を取れるんだよ?」
　ローはたまにそんなユーノを見かねてか、診察のない日はたまにユーノの仕事を手伝っている、主な仕事は膨大な量の本棚を”シャンブルズ”により移動させるものだ、これにより大幅に仕事の効率が上がったのは言うまでもない。

「その休日を定期検診に当ててどうすんだよ、取り合えず今日は疲れを取ることに専念しろ」
「分かったよ、ありがとうロー」
「気にすんな、友人だろーが」
　ユーノは感謝を述べた後、先程とは違い何かを心配するような表情を見せる。
「ロー、少し頼みがあるんだけどいいかな?」
「ん?なんだよお前にしては珍しいな」
　ユーノはあまり人に頼み事をするようなことはしない、それは信用の問題ではなく単に頼み事をするのが申し訳なく思ってしまうからだ、そんなユーノが自分に頼み事をするのだ
　何かそれ相応の理由があるのだとローは思った。
「うん、ローはリンカーコアのことについては詳しいかな?」

「詳しいも何も医者の世界でリンカーコアを専門にしてるやつなんて聞いたことないぞ、しかし何でそんなこと聞くんだ？」
　リンカーコアとは大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出するのに必要な器官であり、魔導師のもつ魔力の源とも言われる。
　しかし未だに全ての事が分かっているわけではなく、研究が現在も進められている。
「うん、僕の幼なじみと言うか親友かな、その子が管理局で働いているだよ」
　聞けばユーノの親友はユーノと同じ年の少女らしくしかも武装隊に勤務しているらしい、管理局は万年人手不足が懸念されておりそれに伴い雇用年齢も低くなっている。
　ローは一瞬、ユーノに彼女かどうか聞きたかったが、ユーノの真剣な表情に言葉を飲み込む。
「へぇ、そいつはすげぇな、それでその子がどうしたんだよ？」
「うん、ローは先週あった臨海空港での爆発事故は知ってるよね」
「ああ、あれだけの規模がありながら、火災での死人はゼロらしいな」
　当初、救出作業は難航していたが、とあるＳＳ級魔導師、執務官、そして武装隊のエースオブエースの活躍により火災での死人はいないらしい。
　その時ローはアリシアを救出していたがその事は知られてはいないようだ。
「それでその子も救出作業をしていたんだ、その後、自分のホテルに帰る途中に突然倒れたんだ・・・・・」
　少女は友人と一緒に臨時に暮らしているホテルに帰る途中倒れたらしい、少女は直ぐに友人に管理局の連携する病院に運ばれたらしい。
「・・・それで、その子は今どうしてるの？」
　アリシアはユーノの話を聞き、心配そうに尋ねる。
「うん、幸い意識を取り戻してるし命に別状は無いんだけど・・・・・」
「・・・・魔法が使えない、そうだろ？」

ユーノが言葉に詰まっていると、今まで口を閉じていたローが問う。
「流石だねロー、そこが頼み事の理由なんだ」
いきなりリンカーコアの事を聞いてきたり、らしくない頼み事をしてくる状況を考えれば自ずと予想は着いた。
「つまり、俺に治療を頼んでるんだろしかし・・・・安請け合いは出来んな」
様々な治療をしてきたローもリンカーコアの治療は初めてだ、そもそもリンカーコアが原因で起こる症例などほとんど聞いたことはない。
しかし数少ない友人の頼みだ、先ずは詳しく調べてみなければ分からない。
「分かった、しかし情報が少なすぎる何か資料が欲しい」
「ありがとう!そう言うと思って、午後から資料なんかを持ってる人と待ち合わせしているんだ、ローも来てくれるかな」
どうやらユーノはローか引き受けてくれると、信頼していたようだ。幸い今日の午後は診察がない。
「分かった、場所は何処だ」
場所は管理局本局の相談室らしい。
「それじゃロー、またね」
ユーノは自分の家に帰っていった。
ユーノが帰った後もアリシアは不安そうな顔をしていた。
「アリシア、取り合えず昼飯にしようぜ大丈夫だよ・・・・・俺がお前を助けた時みたいになんとかなる」
ローはアリシアの頭を撫でながらいう。
「うん、そうだよね!よし、なら元気をつけないとね」
アリシアは台所に向かっていった。

カルテ４　死の外科医の診断

管理局本局にある相談室、対面式のソファーと作業用のデスクと幾つかの本棚と並べられている部屋でユーノとクロノはソファーに並んでいた。

「そろそろローが来ると思うんだけど・・・

もしかしてまよってるのかな？」

ユーノがやはり迎えにいった方がいいのかと思っていると、クロノがユーノに尋ねる。

「ユーノ、君が信頼しているトラファルガー・ローとはどんな人物なんだ？」

クロノはユーノが最も信頼している医者の事が気になっていた。正確に言えば、ユーノと同い年ながら次元世界最高の医者であるとユーノは言うのだ。

無限書庫の司書長まで勤める彼にそこまで言わせるのだ興味が湧かないという方が無理だ

「そうですね、簡単に言えば本当は優しいけど少し不器用な人かな？クロノ提督も会ってみたらわかると思いますよ」

「そうか・・・・ならそうさせてもらうとしよう、後、今はプライベートだクロノで構わんよ」

実際に会ってみれば分かる、百聞は一見にしかずとはこの事を言うのだ。

「じゃクロノさんで・・・・・・「コンコン」

・・・・あっ！来たみたいだ」

相談室のドアがノックされる。

「どうぞ入ってきていいよ！」

ユーノが答えると一人の黒髪の少年が部屋に入ってくる。

「おう、悪いな入口で軽い職質にあっちまってよ」

クロノは少年の姿を見た瞬間、様々な驚きに見舞われた。少年は黒のパーカーにデニムのズボン、ファー状の帽子を被り、手に布に包まれた長い棒のようなものを持っている。

医者と言えば白衣やスーツなどを身につけるものだ、何より彼は医者としてここに来たのだそのような私服では職務質問をされても仕方ない。

「それは大変だったね、大丈夫だった？」
「お前の名前だしたら直ぐに入れたよ」
ユーノは彼の姿に何も言わずに話している、つまりこれが彼の普段着なのだろうかとクロノは思った。
「わざわざ来てもらってすまない、僕は次元航行部隊の提督をしているクロノ・ハラオウンだ」
クロノはローに手を差し出す。
「ご丁寧にどうもな、トラファルガー・ローだ、ミッドチルダで小さな診療所をやっている」
ローは微笑を浮かべながらクロノと握手を交わす。
その後ローはソファーに腰掛る。
「でだ、早速患者の資料を見せてもらってもいいか？」
「ああ、これが君に治療してもらいたい人物の資料だ」
クロノはローに何枚かに纏められた資料を渡す。ローは受け取った瞬間、先程までの微笑を止め、真剣に目を通す。
クロノは先程までのローの雰囲気が一瞬で変わったことに軽い驚きを覚えた。

「患者の名前が・・・・・高町なのは・・・
ってまさかエースオブエースかよ！」
ローは驚いた、高町なのはと言えば管理局きっての実力者であり、その容姿端麗なことから度々テレビや雑誌に出ている。
そして最近の臨海空港での事件でも活躍しますます彼女のファン

が増えているらしい。
「おいおい、いいのか?こんな有名人の治療を俺なんかがして」
「すまない、管理局の病院ではなのはは治せないと言われてな・・・・君しかたよる医者
がいないんだ」
管理局の病院はミッドチルダでもトップクラスの病院だ、当然、最新鋭の治療や医療機器が備わっている。
そんな病院でも治せないと言われ、クロノはどうすることも出来ずにいたがユーノがローの話をし、最後の希望としてローに依頼しているのだ。

「あんたが謝んなよ・・・・・・っとこれは高町なのはのリンカーコアのレントゲンか」
ローは視線を変えずにクロノに呟き、なのはのリンカーコアのレントゲンを凝視する。
「かなり損傷が激しいな・・・・・・・・ふむ」
ローは目を閉じ思案を巡らす、その後資料を何枚かめくり、あるページに目が止まる。
「ローどうかな?」
ユーノはローあまり見ない表情に不安が募り尋ねる。
「ユーノ、そもそも何で高町なのはが魔法をつかえなくなったか分かるか?」
ローは目を開き、ユーノに尋ねる。
「え・・・・それはリンカーコアが損傷したからじゃ」
当たらずも遠からず、ローが聞いたのはそこではなく何故リンカーコアが損傷しなければならなかったのかだ。
医者は患者の治療が仕事であるが、その原因も知ることも必要なのだ。
「確かにな・・・・・先ずは何で高町なのはが魔法を使えなくなったのかを説明するか」
「それは是非ともお願いしたい、管理局の病院でも原因までは分から

ないんだ」
　原因が分からなければ治療の使用がない、さらに高町なのはの場合は今彼女の友人に話さなければまた同じような事が起こるかも分からないからだ。
「だろうな、簡単に言うとユーノが言った通りリンカーコアの損傷だ、リンカーコアはな、魔力を蓄積する機能がリンカーコアの中心部に備わっていてな、魔力を放出する機能が外側に備わっているレントゲンからして、損傷はリンカーコアの外側までに留まっているがかなり損傷が酷いんだよ」
「どうしてそこまで損傷してしまったのだろうか？」
　クロノはローに聞く。
「原因のトリガーになったのは、５年前高町なのはが闇の書事件に関わったことにある
　このとき高町なのははリンカーコアを体外に出されたよな」
　高町なのはは闇の書事件に関わったさい魔力を吸いとられるさい、リンカーコアを体外に出されてしまったのだ、しかしクロノは疑問を示した、何故ならその後なのはは休息をとると回復し、魔力を使えていたからだ。
「しかし、なのなはあのあとも魔力を使えていたぞ」
「リンカーコアもな魔力を使いすぎればそれは一時的に機能は落ちるが大抵は休めば回復はする、しかし今回はリンカーコアが体外に出されたことでリンカーコア自体が損傷したんだよ」
「ならなおさら、リンカーコアを検査したときに確認される筈だよ！」
　ユーノはローに言う。
「何も最初から、こんなに損傷した訳じゃない、例えばその時のキズがこんな小さなヒビならどうだ？」
　ローは１㎜程度に何かを摘まむように指を開く。
「まぁ、このくらいならそんなに影響は出ない、しかしそれに気付かずに魔法を使い続ければ、ヒビは徐々に広がり例えば１０の力で撃てる魔法が１５の力で撃たなければならなくなる、大気中の魔力をリンカーコアに蓄積するときにそのヒビから漏れるからだ、それが積み重

なって今回の事態になったんだろうな」
「でもそれならなのはが途中で気付くんじゃ？」
「それは俺が知りたいくらいだ、管理局は一年に一回健康診断あるんだろ？」
　管理局には一年に一回管理局員を対象にした健康診断がある、当然なのはも対象になっているはずだが何故かリンカーコアの損傷があることが確認されなかったことにローは疑問を抱いていた。
「その筈だが・・・・恐らく、仕事を理由に受けていないのだろうな」
　なのはは管理局での有数のＡＡＡランクの魔導師であるために様々な現場に駆り出されることになる、さらには管理局の人材不足からか
　その仕事量は計り知れない。
「仕事と命・・・・どっちが大切なんだよ・・・・・」
　ローの口調の中に確かな怒りが含まれていた、それと同時にローから僅からながら魔力がにじみ出た。
「――――ッ!!!!」
　クロノは一瞬、ローの言葉に萎縮してしまった、そしてローからでるとても医者とは思えないほどの大きな魔力を感じた。
　それもユーノは同じだが、ローが先程言った言葉が引っ掛かった。
「ロー、確かになのはは倒れたけど命にまで影響なんて・・・・「違うんだよ」・・・えっ？」
「確かに今高町なのはは魔力を使えないに留まっているがな・・・・俺から言わせれば不幸中の幸いだよ、リンカーコアの中心部が損傷したらなその人間は死ぬんだよ、原因はまだ分かっちゃいないがな・・・・・・」
　リンカーコアの研究はまだ分からないことがあるというのはここなのだ、多くの学者たちが討論や推測をしているがいまだに原因は分からない。

「じゃ・・・・・もし、もしリンカーコアの損傷が中心部にまで届いていたら・・・・」
ユーノは声を震わせながらローに尋ねる。
「・・・・・言わなくても分かるだろ、だからそうなる前にリンカーコア自体が自己防衛をしたんだよ」
それによりなのはは意識を失ったのだ。
少しの沈黙のあとクロノは重い口を開く。
「結論から言って・・・・なのはは治るのだろうか？」
クロノの言葉にユーノも緊張した面持ちだ、ローはもう一度なのはのレントゲンを見た後に口を開く。
「・・・・中心部まで届いていたら恐らく手遅れだった、でもリンカーコアの意思が高町なのはを救った、確かに普通の医者なら無理だな、でも俺の力なら・・・・治せる、いや治してみせる!!」
ローの言葉にユーノとクロノは少し安堵した。
僅か１５歳の少年ながら年上であるはずの自分が萎縮するほどの威圧感と今の意思に満ち溢れたら便りになる言葉にクロノはユーノが言っていた意味が分かった気がした。

「よかったらなのはは治るんだね・・・・
本当に良かったよ」
「ははっ、随分と心配してるじゃねぇか？もしかして彼女だからか？」
ローが何時ものからかいの表情を見せるとユーノは顔を慌てて否定する。
「ち、違うよなのはは親友だからだよ、親友を心配するのは当たり前じゃないか！」
「ユーノもそうだが僕の妹も最近元気がでなくてな、妹も安心するだろ」
クロノの妹、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンもなのはも心配してか最近暗い表情が目立っていた、フェイトに限らず八神はやてやその守護騎士たちも同様に心配していた。
「そうかい、悪いがこの事はまだ誰にも言うなよ、安心させるなら治っ

てからだ」
「長期的な治療になるのではないのか？」
リンカーコアの治療ともなれば、手術の予定やその後のリハビリ等少なくとも一ヶ月はかかるとクロノは思っていた。
「いや、別に治療のプランはもう頭のなかで纏まってるし、そんなに長くはならねぇよ、精々一週間だな」
「な・・・・・・そんな短期間で、一体どんな治療なんだ？」
「それは高町なのはに直接いった方がいいだろ、これから高町なのはのところに行きたいんだが連絡取ってくれないか？」

「ああ、わかった・・・・・」
その後クロノはなのはに連絡をとった。
本来なのはには管理局の厩舎があるのだが、普段の仕事の忙しさからか病院を出たあともホテルに滞在してるらしい。

ローたちはなのはの滞在するホテルに向かった。

カルテ5　死の外科医となのは

とあるホテルの一室でベッドに足を伸ばしながら座り
考え事をしている少女がいた。

「クロノ君、突然大事な話ってなんだろう・・・・・」
少女の名前は高町なのは、先程仕事の上司であり友人であるクロノ・ハラオウンから電話を貰った所だ。
何やら直ぐにでも自分に用があるらしく、自分の滞在しているホテルに行っても良いかというものだった。
なのはには得に用事もなかったので許可した。
既に連絡があってから一時間、そろそろ来る頃だろう。

「もしかして・・・・・やっぱり私武装隊辞めなくちゃいやないのかな・・・・・・」
なのはの心のなかで悪い予感が渦巻いてしまう、仮にそうなれば、なのはは魔力を必要としない事務的な部署に転勤になるだろう。
しかし武装隊として、人を助けることに誇りを持っているなのはには受け入れがたいものだった。つい先日も臨海空港でスバルという少女を助けたときも、その少女からの感謝の言葉もなのはが誇りを持ち続けている要因とも言えるだろう。

だからなのはは魔法が使えなくなったことには後悔はしていない、しかしあまりの突然のショックに心の整理がついていないのだ。
そうなのはが思っていると、ドアがノックされる。
「なのは、クロノだ入ってもいいだろうか?」
ドア越しにクロノの声が聞こえる。
「うん、大丈夫なの」

ドアが開き、クロノとユーノが入ってきた。

「あれ?ユーノ君も一緒だったの」
なのははクロノしか来ないと思っていたので少し驚いていた。
「うん、ちょっとなのはの事が心配でね」
ユーノはなのはを気遣うように言う。
「それでだがなのは、大事な話というのはだな・・・・・・・なのは、君を治療してくれる医者をユーノが探してくれたんだ」
「えっ・・・・・・・・それ・・・・・・・本当なの?」
なのはは驚きに包まれた、最新の設備などが揃っている管理局の病院で治療が不可能と言われ諦めかけていたこともあり、クロノの言葉に疑問で返してしまった。
「大丈夫だよなのは、彼は次元世界最高の医師だから、実はね今廊下でまってもらっているんだ、ロー入ってきていいよ!」
管理局の病院でも治せないものを治療出来る人物、なのはは僅かながら緊張していた。
ユーノがドアの方に声を掛けると一人の少年が入ってきた。
「おいユーノ、何大袈裟にいってんだよ」
なのはは少年の姿を見た瞬間、つい本音が漏れる。
「・・・・・・・え?・・・・・・・・・お医者さん?」
なのはの疑問も当然と言えばそうだ、今のローの格好からはとてもではないが医者とは見えないだろう。
「安心しろ、白衣は着ていないが医者だ」
「大丈夫だよなのは、ローはちょっと目付きが悪くて怖いけど根はいい人だから」
なのはの反応がローが職務質問をされたさいの反応に酷似していたのはともかく、ユーノはすかさずフォローをいれる。
「悪かったな目付きが悪くて・・・・・」
ギロリとユーノを睨み付ける、別にローは故意に目付きを悪くしている訳ではないが、初対面の相手には少し威圧的に見られてしまうようだ。その証拠になのはも一瞬驚いてしまった。
「おっと、悪いな俺はトラファルガー・ローだ、年はお前と同い年、ローと呼んでくれ」

ローはなのはが怯えてしまったと思い、謝罪をいれ、自己紹介をする。
「いえそんな、私は高町なのはなの、えっと・・・ロー君でいいかな？」
「ああ、構わない」
お互いに自己紹介を終え、クロノは本題に入る。
「それでだがなのは、さっきも言ったがローには君のリンカーコアの治療をしてもらうがそこまではいいのだろうか」
「うん、でもロー君どうやって私のリンカーコアの治療をするの？」
なのはの疑問に思っていた、管理局系列の病院で治療不可能と言われたのにどのように治療するのかと。それにたいしてローは僅かに頬を綻ばせ。
「そいつはちょいと企業秘密だ、さてそろそろ治療を始めるからお前ら出ていけ、流石に友人と言えど、美少女のあられもない姿は見せられんからな」
「ああ、うん、そうだねクロノさん、僕たちは外に出ましょう」
「そうだな、ではロー頼んだぞ！」
クロノとローはなのはの部屋から出ていった。部屋にはローとなのはの二人だけになり本来なら治療するところだが、ローはなのはの前に立ち・・・・・・・
「さてと、本来なら治療を開始するところだが・・・・・その前に、フンッ!!」
「にゃにゃ～!!!!らにふるの～～～!!」
ローはおもむろになのはの頬を指でつまみ伸ばす、弾力があるのかなのはの頬はよく伸びた。
「何するのじゃねぇんだよ!!お前、たまたま俺とユーノが友人だったから良いものの、
下手したらお前、魔力どころか、命まで失うところだったんだぞ!!!」
「え、それどういうことなの・・・・・・」
ローは管理局でユーノとクロノにした話と同じ話をした。
「今回の原因はお前のリンカーコアが外に出されたのがトリガーになった、でもな、お前が仕事を理由に定期検診を受けていなかったか

ら、ここまで悪化したんだよ・・・・」

ローはなのはのに先程とは違い、静かにゆっくりとした口調で告げる、しかしその中には明確な怒りが感じられた。もし後数ミリでも深く亀裂が入っていたら・・・・そのようなギリギリの状態を理解していないなのはにローの怒りを助長していたのだ。

「でも・・・・でも私は多くの人を助けたくてそれで・・・・・ロー君は人を助けるために頑張るのが悪いと言うの・・・・・・」

なのははローの説教に気圧されながらも、自分の意見をなんとか紡ぐ。

「違う、そうじゃない、お前はこれまで何十人、何百人と多くの人を救ってきたんだろうな、俺はそれを尊敬するしある意味医者と同じようなものだ・・・・けどな、だからと言って自分の命を粗末にするのは違う!」

「私は・・・・・皆に幸せに元気に生きてほしくて・・・・」

「だがもしお前がいなくなったら、お前が救ってきた人と同じ人数が悲しむ、それは

・・・・・誰もそんなの望んじゃいないんだよ」

ローはなのはの性格をおばろげながら理解していた、誰かのためなら事故犠牲もともわない、ローはこの性格の持ち主を他にも知っていた、だから理解できたのかもしれない。

ローはなのはの頬から手をはなす。

「俺が言いたいのはそれだけだ・・・・悪いな只の医者が説教なんかしてよ」

「ううん・・・・・ロー君は間違ってないの、分かったなのは次からは絶対に定期検診を受けるの!」

「無茶しないとは言わないんだな」

ローは薄く笑い、なのはは気まずそうな表情を浮かべる。しかし少なくともローの伝えたいことは伝わっただろう、こういうことが日常的に出来れば苦労はしないのたがそれはまだ遠い話だ。

「よし、じゃあ治療を始めっか！」
「うん！・・・・・・あっでもその、ふ、服とか脱がないといけないのかな／／／／」
　なのははモジモジと足をくねらせ、頬も赤みがかかる、年頃の少女ともなればいくら医者であっても下着姿などをさらすのは羞恥に見舞われるだろう。
　そしてそれが男性であり、また同い年であるローであれば尚更だ。
「ああ悪い、あれ嘘だから、心配すんなお前はちょいと後ろを向いてくれればいい」
　取り合えず下着姿などにならなくて良いことに安堵するが、ではどのように治療するのか疑問に思いながらも後ろを向いた。
「よし、じゃあいくぜ・・・・・・”ＲＯＯＭ（ルーム）”」
　ローは手のひらを下にし右手をかざす、すると部屋を中心に青白いドーム状の円を展開する。
　なのはは突然のことに戸惑っていた。
「えっ？え、これなにロー君」
「大丈夫だよ、これは俺の手術室みたいなもんだ、後少しくすぐったいが我慢してくれ――――”メス”」
　ローはなのはの背中に手を当てると、まるで吸い込まれるかのようになのはの体に入っていく。
「にゃ、にゃはははは!!くすぐったいよロー君!!」
　何が起こっているか分からないなのはは背中のくすぐったさに笑うだけであった。
「もうちょい・・・・よし、取れた、見てみろこれがお前のリンカーコアだ」
　ローは立方体状のＲｏｏｍに包まれたなのはのリンカーコアを手に取る、なのはのリンカーコアはヒビが全体的に深く刻まれており、いつ崩壊してもおかしくないくらいだった。
　なのはは突然自分のリンカーコアを見せられ、どうやって痛みもなく取り出したのか、そしてリンカーコアの状態に唖然としていた。
「何でだろう・・・・・・・・とても胸がズキズキするの・・・・・・・」

目の前にあるリンカーコアがまるで今の自分のような心境になのはの心はとても切なくなった。
「だろうな・・・・・安心しろ、もうすぐその痛みも俺が直してやるからよ」
「うん、お願いするの」
ローは長い袋に包まれていた鬼哭を取りだす、なのはは何故治療に刀が必要なのか疑問に思っていた。
「ロー君、何で治療に刀が必要なの？」
「まぁ俺の手術に必要なんだよ、後これでもデバイス何だぜ、さて先ずは治療方法について説明するか　・・・・・・・・・」
ローは鬼哭を抜く。
「先ずはお前のリンカーコアのヒビを魔力で埋める、知ってるか？リンカーコアの外側は魔力で形成されてんだぜ、その為にお前のリンカーコアの内部から魔力を満たす、悪いが内部からじゃないと奥までひびに到達するか不安だからな」

「でもどうやって内部から魔力を満たすの？」
「今からやってやるよ、いいか見てろよ――――”切断（アンビュテート）」
ローは縦に鬼哭をおろすと、なのはのリンカーコアは真っ二つに割れた。
「えええええ～!!!ロー君！大丈夫なの!!」
なのはは狼狽してローに詰め寄る、先程リンカーコアの内部が損傷すれば死ぬと聞かされたばかりなのだ、なのはの反応も当然だろう
勿論、リンカーコアを体内から出したり、ましてや真っ二つにしてなのはに身体的異常が見られないのはローの能力であるからだ。
「大丈夫だよ、これも俺の能力だ、そしてこの魔力をお前のリンカーコアに流し込む」
ローは手のひらに大気中から集めた魔力をなのはのリンカーコアに流し込んでいく、すると徐々にヒビが塞がっていく。
「――――よしもういいか、”接合（インスクレイト）」
ローは中指と人指し指をくっつけると、流し込んでいた魔力がヒビ

に定着した。ローはまたリンカーコアをなのはの背中に戻し結果を告げる。
「よし、治療は成功だ、今はまっさらなただの魔力だが、少しずつお前の魔力と同化していくそれまで魔法は使うなよ」
「うん！・・・・・・あれ、何でかな・・・あの、ちょっとロー君、ゴメンね・・・・」
ローが治療を成功したことを告げると、それまで明るく振る舞っていたなのはの目にじんわりと涙が浮かぶ、なのはは必死に止めようとするが全く止まる気配はない。
「・・・・・・いや、たまにお前と同じような患者を見るからよ・・・・良かったら少し部屋から出ていようか？」
ローは特に慌てるそぶりも見せずなのはに語りかける、前日ローが治療した少年も今のなのはと同じような状態であったからだ。
「・・・・・・ううん、あのねロー君・・・・・もし良かったら背中を貸してくれないかな・・・・」
今に途切れそうな弱々しい声、必死で何かを押さえるようなそんな感覚だ。ローはなのはの言いたいことを理解したのか、少し思案した後口を開く。
「・・・・・・・・・・・・お前が良いなら、別に構わない」
ローはなのはのベットに背中を見せるように腰かけると後は何もしゃべらなくなった。
「ありがとう・・・・ヒグッ、グス・・・・・・・うわわわわぁぁん～～～!!!」
お礼をのべた後、なのはは今まで堪えていたかのように泣いた、管理局のエースオブエースと言われる彼女もまだ１５歳の少女なのだ、一時は絶望的な状況から救われた安心感とそして今までの不安が爆発したのだ。
なのははローの背中に額をつけ、肩に手をおき感情をさらけ出している、ローはなのはに右手を重ねる、それは無意識に近い行動だった理由は説明が出来ない、しかし一つ言えることがあれば、ローは患者であるなのはに安心感を与えることが医者である自分の仕事と思っ

ているのだろう。
ローはなのはが泣き止むまで、微動だにせずその場に居続けた。

なのはが泣き止んでから数分後、ローは手を放し、なのはに問いかける。

「・・・・・・・落ち着いたか？」
「うん、ありがとうロー君」
なのはの目はまだ多少の赤みがかかっていたが、何時もの高町なのはに戻っているようだ。
「そうかい、それにしても随分と大声でないたな、俺が防音魔法を使わなかったら今ごろユーノとクロノが駆け込んで来てたぞ」
「にゃ!!あの・・・・・・・ありがとう」
「気にするな、それも医者の仕事ってな！」
ローは不敵な笑みを浮かべる。
「うん、またこれでいろんな人を救えるよ」
「まぁ意気込むのはいいが、一週間は魔法は使うな、後運動も軽いジョギング程度にしてくれよ？」
「分かったの!!ロー君、本当にありがとうなの!!」
なのははローの手を握り、太陽のような明るい笑みを浮かべる、ローはいきなり手を握れたことに驚き更になのはの笑顔にたじろぐ。
ローは基本的に医者としてのスイッチが入っているときは男女の配慮はすれど別段意識することははないが、そうでないときはなのはのような美少女等には意識してしまう。
「お、おう、まぁ程々にな・・・それにしても、管理局じゃ白い悪魔やら魔砲少女なんて呼ばれてるお前でも、か弱い所があったんだな？」
ローは口角を上げ、からかうようになのはを見る。
「む～～!!酷いよ、なのはだって女の子何だよ!!」

なのははむくれながらローに反論する。
「そうだな・・・・今のお前は、俺からしてみればただのか弱い美少女・・・・・そんな印象だな」
「ロー君、美少女は言いすぎだよ!!」
否定するなのはであるが、若干頬を赤く染め満更でもないようだ。
「そうかい、多分お前の友人や仲間なら・・・・同じことを言うと思ったんだけどな」
ローは備え付けのテーブルの方に目を向けた、そこには多くの花束やお見舞い品が置かれていた。
「随分と人望があるんだな、早く連絡して安心させてやれよ、クロノ提督の妹のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンだっけか、そいつも元気がないとかで提督が心配してたからな」
「フェイトちゃん・・・・・分かったの、直ぐに連絡するの」
「そうしろ、さて俺はそろそろ帰るか・・・・・・・
ああ、そうだ悪いが俺が治療したのは秘密にしてくれ、俺のレアスキルが管理局にばれんのは不味いんだ」
ローのもつレアスキル、それがどれ程有能な能力かはなのはもよく理解できた、だからなのはも少し不満げながら了承した。
「うう、皆に紹介できないのは残念だけど、分かったの・・・・・」
「悪い、そうだ一応俺の連絡先を渡しておくぜ、何かあったらまたここに連絡しろよ」
ローはなのはに連絡先を渡す。
「うん、それでねロー君、治療費は・・・・」
「あ、要らねぇよ俺は医者としてきたが今回は友人の頼みで来たんだからよ」
「そんなのダメだよ!!何かお礼をさせてほしいの・・・・・・」
なのはの性格上、中々引き下がらないことはない見に見えていたのでローは考えあることを思い付く。
「あっそうだ、ならよお前の友人のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンのサインをくれよ、俺の妹が熱狂的なファンでな」
「え、いいけど本当にそれだけでいいの?」

「いいんだよ・・・・じゃあななのは、お大事にな」
「うん！ありがとうなの!!!」
ローはそう言い、部屋から出ていった、その後クロノとユーノに報告した後ローは家に帰って行った。